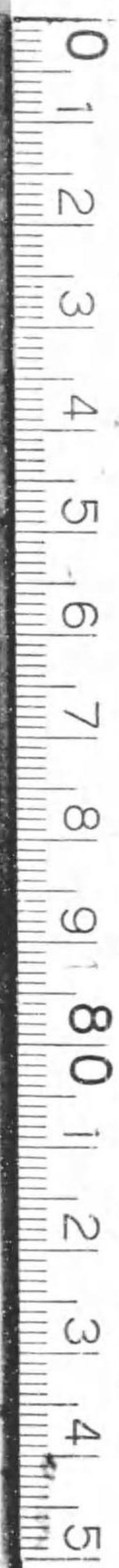


特204

615

蘇州府志卷之五
風俗志

始



特 204
615



妹背山婦女庭訓

ゆいせやまをんなのていくん



妹背山婦女庭訓

目次

杉酒屋の段	………	一三
同 註釋	………	一五—一八
○	………	
妹背山婦女庭訓筋書	………	一〇
挿繪		
凸版口繪		



稽古本 解説附 義太夫名曲全集

妹脊山婦女庭訓

杉酒屋の段

日と俱にいとなむさまも入相の四方のいちぐら戸ざし時子
太郎跡を打見やり灯を上げ表の戸夜の構へのそこ爰とこな
たの道より歩寄る振の袖の香やことなき面を隠す絹被誰し

ら絹のやさ姿窺ふ内に隣の軒しらせのしはぶき主の求

『今宵はどふして早かりし、サア〜、こちへ』

と其跡は、言はず語らず手を取て、戸口立よせ入跡に、子太郎は不審顔隣の門口耳を當聞すまして立戻り、

『何でもとなりのゑぼしめはおれとは違ふて、よつ程ゑらい色事仕じやわい、あいつが見ごとゑぼしで、アノ代物しめをると聞へた、こちのお娘に聞せたら、大抵の事じや有まい、エ、はし早いやつでは有』とつぶやく所へ娘のお三輪寺子や戻り、足早に門口はいれば、

『ヤお三輪様戻らんしたか、サア〜事じや〜〜大事じ

や大事じや』

『オ、あの人わいの何じやいの、わしに悔りさしやつたはいの』

『さしやつたわいの、さしやつたわいの所かいの、コレおまへに忠義をいふて聞す』

『忠義とは何の事じやいの』

『エ、忠義とは忠臣の事じやわいの』

『サア其忠臣はしつてゑるがの、それがどふぞしたかや』

『サ其忠臣は、アノ隣のゑぼしめが』

『隣のゑぼしとは、ム、求様の事かいの』

「オ、求々、其求の姿からおこつた事、こちのかみ様は家主へ
用が有ていかしやつた、其跡へ何じやかしらぬが、眞白な絹を
かづき、幽霊かと思ふたら、美しいけんさいが、隣の門口ことこ
とと叩いた、そしたら求さんがすつと出てよふ早ふ来たなア
と、手に手を取て内へ這入た、それからおれがじつとして聞て
居たら、ソレこちへやとふ男共が、朝の間に酒桶洗ふ様に、シイ
くといふ音がした、どふでもありや、求様が、さゝらでこする
と見へるわいな、何とお三輪様、コッヤだまつて居られまいが
ナ」

「ム、そんなら何といやる、求様の所へ美しい女中様が見へ
て、其女中様を連立て這入しやんしたといやるのか」

「アイ」

「そりや合點のいかぬ事、幸か、様も留主なれば、そなた往て
求様を爰へ連れて戻てたも」

「オット合點呑込だ」

と、走り出て隣の門、われる斗に打叩き、

「コレ、求様隣の酒屋から使にきた、今のが濟だら印判持てご
さんせ」と、口から出次第、求は悔り何やらんと立出れば、物を
も云ず、

「マア、くこちへ」と無理やりに手を引連れて我家の内、それと

見るより娘のお三輪口に云ねど赤らむ顔

『求様お歸りなされたか』

『ホ是はくお三輪様寺屋へお出なさつたげな』と互ひにあちな墨付を子太郎がひつ取て、

『サアおれが役はもふこれ迄そこへ何かの立引さんせ爰らで我等粹を通し夜食の扶持に有つかふ、兩人共後に逢ふ』

と納戸へ走り入にける。跡に二人はつきほなくおぼこ育の娘氣に思ひ詰たる一すちをいはふとすれば胸せまり、

『今子太郎に聞たれば美しい女中様が宵からお前へきてじやげな定てそれは隠し妻是迄お前とわたしが中逢事さへも』

たま／＼に千年も萬年もかはらぬ契りとおつしやつた其約束は偽りか浮世の譯も辨へぬ在所育のわたしでもいひかはした事忘れはせぬ餘りむごいと取付て涙先立恨言、

『是は思ひよらぬ疑ひ成程女中はきて居るがあれはソレ春日の神子殿其連合の禰宜殿の烏帽子を誂に見へたのじや美女は愚いかな天女が影向有ても外へちる心はない和歌三神を誓にかけ偽りは申さぬと時の間に合落付せば遺おぼこの解やすく神様迄誓言にそれでわたしも落付た必ずかはつて下さんすなと立上つて七夕に供へ祭りし二つのをだ巻持出して前に置、』

『わたしは寺やへいた時に、お師匠様に聞て置いた殿御の心のかはらぬやうに星様を祈るには、白い糸赤い糸をだ巻に針を付むすび合せて祭るとやら』

『オ、それが則願ひの糸の乞巧針』

『ム、お前もよふ知てじやなア、白い糸は殿御と定女子の方は赤い糸、それでわたしも此願込寺やで見た本の中に心をかけし女の歌ア、何とやら、オ、それよ、懸渡る思ひはち々に結ぼれて、幾夜願ひの糸のをだ巻』

『ホ、其男の返しには逢見ての後もねがひの糸筋をよそへ亂すな君がをだ巻』

『アイくそふでござんした、いつ迄もかはらぬし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が持、契りも長き願ひの糸、夫婦の約束星合に鵲ならぬをだ巻を千代のなかだち取かはし、肌につ合ふわりなきえにし、求が内より以前の女歩出てこなたの門口、隣の烏帽子折様はこなたへ来てござるかな、赦さつしやれ』と内へ入姿に求は手もちぶ沙汰、お三輪は何の氣も付ず、

『ア、あなたが今のお人かへ』

『オイノあれく、神子様じや、それで薄衣着てござる、ナア申お前様はアノお連合様のゑぼしを誂へにお出なされました

のじやナアそふでござりませふがな、サ、サ、そふでござります』と紛らかす、つゝむ詞の絹をもる、月の笑顔をびんとすね、

『コレ申求様、アノ女中はおはしたか、何人でござります』

『アイヤ、是は此酒屋の娘御』

『ム、其マア隣の娘御と最前から久しい間何の用がござりました』

と問れて求はこたへもなくうちつくそぶり見て取お三輪、
『ア、申、コレ神子さんとやら云女中様、人をマアおはしたか何のとひつこなした物の云やう、求様にはアイわたしが用が

たあんとござんす、おまへのお世話にはなるまいし、かまふて下さんすな』

『オ、これははしたない其やうにいはいしやつても、そもじなどの用を聞求さんじやないわいのふ。サアお歸り』

と手を取ば、お三輪が隔て、『イエ、くくわたしはまだ用がある、逝す事は成ませぬ』

『イ、ヤ、爰には置はせぬ邪魔せずとそこ通しや』

と手を引立て、立出れば、イヤ放さじとお三輪も又あなたへ引ばこなたへ引譯も渚にたわれる雁、つばさふり袖ふり分すがた、戀をあらそふ其折から、いきせき戻る此家の母、

『ヤア求殿、こなさんには用が有どつこへもやる事ならぬ、動くまいぞ』

と身構へに、何かはしらずしら絹の姫は外へと出行を留る求にまたすがる、娘をおしわけ母親は、求はやらじと引とどめ、つなく手と手をしがらみの風にもまる、あらそひに、子太郎立出見まはして、これ幸ひと母親の帯にしつかりく、つたる繩先桶のみ口にゆひつけ納戸へにげて入。こなたはたがひに戀したひすがたみだる、姫百合の手をふりきれば一時に、亂れてはしるを母親が、やらじと追ばつなぎ繩りきむひやうしにのみ口ぬけ、酒は瀧津瀬、びつくりはいもう、三人門へお

くれじと、同じ思ひを跡や先道をしたふて三重追て行く。

杉酒屋の段註釋

〔いちぐら〕 商店の倉。又は店。

〔夜の構へ〕 店や倉の締りをする事。

〔やごとなき〕 やんごとなき。尊い。高貴。

〔絹被〕 さぬかづき。(さぬかづきと讀んでは全く意味が異ひます) 昔身分のある婦人が外出の時に用ひた特殊の服装で、頭から上半身へ被せて、顔の所は抑へて歩くのです。生地は薄い絹を用ひる。

〔となりの糸ほしめ〕 この家の隣にゐる求といふのは烏帽子折であるから、それを罵つていふ。

〔見事な糸ほして〕 この烏帽子は被り物ではない、例の下がかつた言葉。

〔聞へた〕 分つた。

〔はし早いやつ〕 はしっこい奴。

〔けんさい〕 單に女のこと。

〔寺屋〕 寺子屋。手習師匠の家。昔は皆寺子屋で初等教育を受けたものです。

〔墨付〕 「互にあちな——を」といふのは互ひに變な顔付をしてゐる、一寸妙な具合であると云ふことを、娘のお三輪が寺子屋から戻つて來たといふ文句があるので、墨付と洒落て云つたのである。

〔立引〕 争ひ。

〔夜食の扶持に有つかふ〕 夜食の馳走にならふ。

〔兩人共後に逢ふ〕 これは召使ひのいふべき言葉ではない、芝居のセリフを真似て、ちよつと氣取つて見たのである。

〔つぎほなく〕 接穂なくといふ意味。何處から何う言葉を接いで好いか妙にテレてしまつて當

惑してゐる。

〔禰宜〕 神主。

〔影向〕 えうがう。「天女が——あつても」。天降ること。

〔和歌三神〕 和歌の神として奉ずる三神。即ち住吉の表筒男命、中筒男命、底筒男命をいふ。また衣通姫、柿本人麿、山邊赤人をも和歌三神といふ。こゝでは住吉の和歌三神をいふ。

〔をだ巻〕 苧環。苧績を中を虚にして外だけ圓く巻いたもの。

〔月の笑顔〕 女の顔の上品で美しいのを形容して「月も閉ぢ花も羞らふ」など、支那の古い詩にもありますが、橘姫の上品な顔を形容して月の笑顔と云つたのであります。

〔うちつく〕 うちくする。もぢくする。踏らふ。

〔おはした〕 公卿、大名等に仕へて雑用に服する女。下女。

〔ひっこなした〕 他ひとを見下みくだした。こなすとは悔あやどること。輕蔑けいべつすること。「——物のいひやう」

〔はしたない〕 行儀ぎやうぎの悪い。不ぶ作法さぽうな。

〔そもじ〕 おまへ。

〔わけも渚〕 渚なみさとは波打際なみうちぎは、水際みづぎは、水みづの邊ほとりをいふ。わけもなくといふ詞ことばを懸かけてある。

〔たわれる雁〕 戯たわひれ遊あそんでゐる雁かり。お三輪みつわと橘たちばな姫ひめとが求もとめを引ひッ張はり合あつて争あそつてゐる姿すがたが、ち

やうと水みづの邊ほとりで雁かりが戯たわひれてゐるやうに見みへる。「たわれる」は戯たわひれること。

しものせりなをもんかゝりしちん
妹背山神の薩御

解附
古本義太夫名曲全集

妹脊山婦女庭訓

解題

蘇我の蝦夷、蘇我の入鹿親子の者夙に逆心を抱き、王位を奪ひ、國家を我物にしようとなんて、長らくも三種の神器を掠め取り、時の帝天智天皇をすら追出してつたので、藤原の鎌足を始め、忠節の士は皆山野に隠れて時運の到るのを待つてゐた。

然るに太宰少貳の後室定香と大判事清澄との二人は心あつて悪と入鹿に款を通じ、その虚を窺つてゐたが武運拙くして清澄の悴清船と定香の女鎌島とは哀れにも犠牲となつて相果てた。太宰の別業は大和の妹山にあり、大判事の別業は紀州の脊山にあつて、吉野川を隔てゝゐた。また杉酒屋の娘お三輪の死は貞女の鑑ともいふべきであるから、それで「婦女の庭訓」としたのである。

杉酒屋

大和三輪の里に一軒の酒屋がある。昔は軒先に杉ノ葉を圓めて、ぶら下げたのが酒屋の標であつたので、杉酒屋といふのです。

軒並に小さな家が列んでゐて、何れも借家であるが、この家の主人は後家さんで、お三輪といふ娘が一人ゐて、外には店の者で子太郎といふ少し甘いのがゐる。

今日、杉酒屋では井戸替をした。この井戸は中々好い水が出るので、相長屋の人たちは不斷この水を貰つてゐるので義理が有るから、親父連は皆な惣出で手傳つてくれましたから、お三輪の母はそのお禮に酒を吐と振舞ひました。何がさて底のない連中のことであるから、呑むはく池の鮒が水でも呑むやうにアブくと呻り立てたので、子太郎は呆氣に取られて「この酒はお神さんが大切にしていゐる男山といふ醋酒であるのに、それを爾う無茶苦茶にやられて

は耐つたものでない」と云つて膨れッ面をして居りますが、呑兵衛連中一向平氣なもので、グビくやらかして居る處へ、隣の烏帽子折が戻つて來ましたので、長屋の者が直ぐ取つ捉まへてグツく文句を並べましたのは、同じ相長屋に住んでゐながら、井戸替の手傳ひもしないと云ふのは餘まり己達を踏付にした仕打ではないかと云ふ苦情なのです。

求は悔りしまして、「何分土地不案内でございます爲に飛んだ失禮をいたしました」と云つて兩手を突いて謝りましたものですから、皆な機嫌を直して一緒に呑めや唄への底抜け騒ぎを始めました。

やがて表の方から苦い顔して入つて來たのは大家であります。「コレく何といふ騒ぎだ、もう少し静かにしないか」と叱つて見ましたが、てんで耳にも入れません、ドンチャンく騒ぎ立てますので、終ひには大家も釣込まれて、一緒に踊り出すといふ始末。

だが、大家には大切な用が有つたので、ふツと其れを思ひ出して、内儀さんに會つて、實は

少し詮議の筋が有つて役所から呼びに来たから、俺と一緒に来て下さいと云ふので、お三輪の母はそこ／＼に支度をして、子太郎に留守を頼んで出て行きました。その詮議の筋といふのは藤原鎌足の伴、淡海といふ人が此の界限に隠れてゐるらしいから、見つけ次第訴へて出るといふ「お觸れ」なのです。何を隠さふ、その淡海こそはツイお隣にゐる烏帽子折であつたのです。何が故に藤原の淡海とも云はれる人が、その尊い身分を棄て、斯様な町長屋に住んでゐるのでせうか。また何ういふ譯でお尋ね者になつてゐるのでせうか。これには深い譯があるのです。時の帝天智天皇は一天萬乗の御位にありながら、逆臣蘇我ノ蝦夷のために御所を追はれて、一たびは草深い山の中に潛んでゐてになつたのを、鎌足公がお引取り申して、また外の場所へおかくまひ申上げて居るのでございます。

さて蝦夷は天皇を追斥け、八咫ノ鏡を奪ひ取つて、春日神社の裏手へ穴を堀つて潛かに隠して置きましたが、自分の跡を繼がせようと思つた伴の入鹿が、あべこべに佛法に歸依して、父

の逆心を恨むの餘り、世を果敢んで自ら定に入つて死なふと致しました事から萬事咀唔いたしまして、鎌足と大判事との爲に詰腹を切らされてしまひました。

然るに入鹿が佛法に歸依したと云ふのは嘘で、實は父蝦夷に輪を掛けた程の逆賊でございまして、定に入るなどは眞赤な偽り、本當は自分が天子の位に即いて一國を我が思ふ通りに爲ようと云ふので、それには先づ三種の神器を奪はねばなりませんから、定に入ると見せかけて御寶藏まで穴を堀つて、人知れず手に入れようとした所、鏡と曲玉とは疾に雲隠れをして了つて、叢雲の劍だけ有りましたから、それを横取りして自分の佩し料となし、別に模造した物を御劍と稱して勿體らしく飾つて置きましたのを誰知る者もありませんでした。

入鹿の勢ひといふものは宛ら旭日の昇るやうな有様でございすから、忠義無二の大判事清澄だの太宰ノ少貳の後室定香なども入鹿の幕下に附いた程で、兎ても手を出すことが出来ませんから、鎌足父子も詮方なく、時節の來るまでは山里に隠れてゐる事に定めましたけれど、一

日たりとも安閑としてゐる譯には行きませんから、いろ／＼と手を廻して入鹿を滅す工夫を致しました。また入鹿の方でも鎌足父子がゐては邪魔になつて仕様がありませんから、八方へ觸れを出して、見付け次第引ッ括らふとしてゐるのであります。

淡海は山を出ました。そして烏帽子折となつて大和ノ三輪の里へ流れて來ました。ちやうどお三輪の隣の家が空いてゐたので、そこへ小さな世帯を持ちましたが、何分にも綺麗な男なので、何時どちらから言い寄つたともなくお三輪と求とは人知れず契りを結びました。

お三輪の家で井戸替のあつた日は、七夕の馳走に寺屋へ呼ばれて、お三輪は不在でありました。

日の暮方に長屋の人達は歸つてしまひました。彼方此方で表を卸したり裏を締めたりする音が致します。子太郎も戸締りを致しまして、其處いら見廻つて歩きますと、何處から來たのか薄いベール見たやうな物を被つた美しい女が、ふわ／＼と町中へ出て來たから、幽霊ではな

いかと思つてギョツとして覗いて居りますと、お隣の烏帽子折の前へ行つて、ふと立留りましたので、ハテ不思議な事があるものだと思つて、デーンと様子を窺つて居りました。

その衣被をした美しい上臈が、コン／＼と小さな咳をいたしますと、表の戸がスーと明いて求の華奢な手がヌツと出て、

「マア大層早く來ましたネ」とか何とか云ひながら、その娘の手を握つて、然も懐かしさうな笑顔を見せました。それから何うするかと思つてゐると、手を引合つたまゝ家の中へスツと消えてしまひました。

子太郎は耐らなくなつて表へ飛出しました。而して拔足して、軒下まで忍んで行つて、雨戸へ耳を附けて中の様子を聞いて居りましたが、只だスウ／＼いふばかりで何が何だか分りませんから、到頭劫を煮やしてバター／＼と家へ駈込んで來ますと、丁度そこへお三輪が戻つてまゐりましたから、やけ糞半分に呟付けましたので、お三輪は角を生しまして、直ぐ求さんと呼ん

で来てくれと申しますので、茶目さん大喜び、二つ返事で飛んで行きまして、何だか譯の分らない事を云つて表の戸をドカ／＼と叩きましたから、求は恟りして飛んで来ますと、お三輪が戻つて居りましたから、白ばツくれて挨拶を致しまして、何の御用ですかと尋ねます。お三輪は男の不實を恨みまして、あれ程固い約束をして置きながら外に女をこしらへると云ふのは餘まり人を踏付けた仕打だと云つて口説きますので、求は苦しき程に、イヤあれは爾ういふ譯のある女子ではありません、手前共のお客様で、あれはッノ神主の御内實で、お連合ひの烏帽子を注文にいらしたのだと體好く囁かしてしまふ。

お三輪はまだオボコですから欺されるとは知りません、それではお客様であつたのかと胸を撫で下しまして、七夕様へ上げた二つの苧環を示しまして、この白い苧環は求さん、この赤い苧環は私ので、かうして二人仲好く添遂るやうに星様へお願ひ申してゐるのだと爾も嬉しさうに申しますので、求は不憚に思ひました。

お隣から呼びに来て出て行つた求は、何時まで経つても戻つて来ませんから、何うした事かと思つて、先刻尋ねて来た娘は到頭待草臥れまして、臆面もなく自分からお三輪の家へやつて来ましたので、争ひが起りまして、その娘は無理やりに求を連れて行かふとする。お三輪は遣るまいとする。そこへアタフタと戻つて来たのはお三輪の母親です。この態を見るより、

「ヤアお前さんは大切な用があるのだよ、何處へもやる事はなりませんよ」と云つて求を引戻してしまひましたから、仕方がありません、娘は惜々として出て行かうと致しますと、求はそこに有つた白い苧環の針をその娘の裾へ刺しましたから、くる／＼と糸を繰つて行くに連れて、我身も共に出て行かふとしますので、お三輪は手早く赤い苧環を取つて、求の裾へ刺しましたから、これもくる／＼と糸を繰り出して行きますと、お三輪も共に二人の跡へ引張られて行きますから、母親は恟りして力まかせに引戻さふとして居ります。

それを見て、奥からソツと出て来たのはあの子太郎です。拔足差足してお内儀さんの後へ来

て、酒樽の呑口へ繩を結び付け、その片端をお内儀さんの帯へ結び付けたから耐りません、呑口が抜けてザッと酒が溢れる。恠りしてまご／＼してゐる隙に娘と求とお三輪とは宛て途もなく夜道を走つて行きます。

茶目さん、臺所から首を出して、赤い舌をペロリ。

求を尋ねて来た娘といふのは、實は蘇我ノ入鹿の妹で、橘姫といふ高貴の婦人であつたのです。

この次に「道行」の條があつて、それから「三笠山」の御殿になるのです。求は橘姫の手から十握の劍を奪ひ返すことになるのですが、そのお話は次の巻に譲りませう。

昭和四年九月廿五日印刷
昭和四年九月廿八日發行

解説
姝背山婦女庭訓

不許
複製

編者 玉井清文堂編輯部

發行兼印刷者 玉井清五郎
東京市神田區表神保町十番地

發行所

東京市神田區表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部屬印堂文清)

324

365

終

